

九月

一 河津のゆゑに

一、請全書生

歟 月以之流 空而之自 有之

方之為書

一 留市平分物物下 御守

後

即德安河之北水亭寺

江蘇省立第一中學

和合之氣

李長蘅

二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、

是れが、此の世の、此の世の、

一 諸君の御覧の如く、この世は、



和歌のあはれ

一 くらげのしるしは世にあらざるを  
身にしみて思ふ人の心は  
唯、くらげのしるしにあらざるを  
思ふ

一 井上氏の心は、  
おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ

一 井上氏の心は、  
おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ

一 井上氏の心は、  
おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ

一 井上氏の心は、  
おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ

一 井上氏の心は、  
おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ

一 井上氏の心は、  
おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ  
心は、おのづからあらざるを思ふ

井上氏の心は、  
おのづからあらざるを思ふ

木一子

一子

中

一子

一子

石

一子

一子

一子

一子

一子

一子

一子

一子

一子

一子

一子

一子

一子

五

一子

一子

一子

一子

一子

一子

九

一子

[illegible]

市井の世に  
御修養の  
人々御下より

又方 酢漿草 五月五日采  
洗淨 切細 鹽水浸一宿 焙乾  
入麝香 研末 酒服 治一切瘡毒

[illegible]

南  
日  
秋  
新  
政

ゆきぢやう

而用之是た何んぞを爲す  
一而衆の上は、衆の王たり

市井の如く  
 けりて同く  
 けりて同く

市會中古物之種  
有力者多見之

一  
四月是月、  
方日、  
春如、

一、夢、水、子、只、由、形、屋、通、了、山、

此是乃皇廟  
 乃係吾家祠  
 乃係吾家祠  
 乃係吾家祠

一、  
持の  
万  
の  
の  
の

92



河内を流るる水は

いづれなる

石川を流るる水は

大志を流るる水は

川を流るる水は

中を流るる水は

いづれなる

いづれなる

十一

今更なる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

十二

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

いづれなる

[illegible]

金十元  
銀五元

一 毛 兄 之 方 亦 甚 多 故 又 甚 矣  
 一 秋 意 甚 多 故 亦 甚 矣  
 一 毛 兄 之 方 亦 甚 多 故 又 甚 矣  
 一 秋 意 甚 多 故 亦 甚 矣

十四日

一  
佛國之  
御守

西之北

一、法華經心要  
 二、法華經心要  
 三、法華經心要  
 四、法華經心要  
 五、法華經心要  
 六、法華經心要  
 七、法華經心要  
 八、法華經心要  
 九、法華經心要  
 十、法華經心要

一  
月  
日  
年

一、  
二、  
三、  
四、  
五、

一、家長の責任

ついでに

一 秋を過ぎて冬に入ると、雪が降り、寒さが厳しくなる。この季節は、体調を崩しやすい時期である。冬は、体を温かく保ち、寒風をしのぐことが大切である。

冬は、

一月は、

秋を

一 秋を過ぎ、冬が来る。この季節は、体調を崩しやすい時期である。冬は、体を温かく保ち、寒風をしのぐことが大切である。

一 清く、

秋を過ぎ、冬が来る。この季節は、体調を崩しやすい時期である。冬は、体を温かく保ち、寒風をしのぐことが大切である。

ついでに

冬は、

一 秋を過ぎ、冬が来る。この季節は、体調を崩しやすい時期である。冬は、体を温かく保ち、寒風をしのぐことが大切である。

冬は、

一 秋を過ぎ、冬が来る。この季節は、体調を崩しやすい時期である。冬は、体を温かく保ち、寒風をしのぐことが大切である。

一 川上は、秋を過ぎ、冬が来る。この季節は、体調を崩しやすい時期である。冬は、体を温かく保ち、寒風をしのぐことが大切である。

五

[illegible]

一、  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

[illegible]

一、定方為本，中氣足，便為補。平氣

五絶詩三首を以て

一二三四五

ちや、私を建没地即中田と  
 するより、左下を左中田と  
 お湯を引く中田と布「てん

九月七日 大實法親王

[illegible]

公名解字

久世方々を以て之の志を以て之  
を以て之の志を以て之

大

正長湯之湯客者利和の土地  
新堀之湯客者利和の土地  
とておもしろく目下は  
長堀之湯客者利和の土地

少部より金神様御中願之入  
お局様より金神様御中願之入  
本令御事之終り御座り候  
ありし由々々々々々々々々々  
九

一 眾人各盡其力

[illegible]

此來之方より多に付左程に  
しるす

一、  
 直  
 海  
 う  
 中  
 本  
 又  
 但  
 年

[illegible]

一、因其在部中，長於此，故其志氣  
 必高，故其志氣必高，故其志氣必高  
 必高，故其志氣必高，故其志氣必高

[illegible]

同十

[illegible]

田中重太郎  
町中  
町中

[illegible]



一 國史の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、

一 太平記の記述に於ては、  
太平記の記述と異なり、





一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

因 市 乃 至 此 處

一 曉 夢 中 何 處 有 花 香 似 夢 中 所 見 之 花 香 也

此 處 有 花 香



作しつた十の... 江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

江戸... 町... 町... 町...

一 幸ふもたつ仕度なりとておぼえぬ

一 幸ふもたつ仕度なりとておぼえぬ

一 幸ふもたつ仕度なりとておぼえぬ

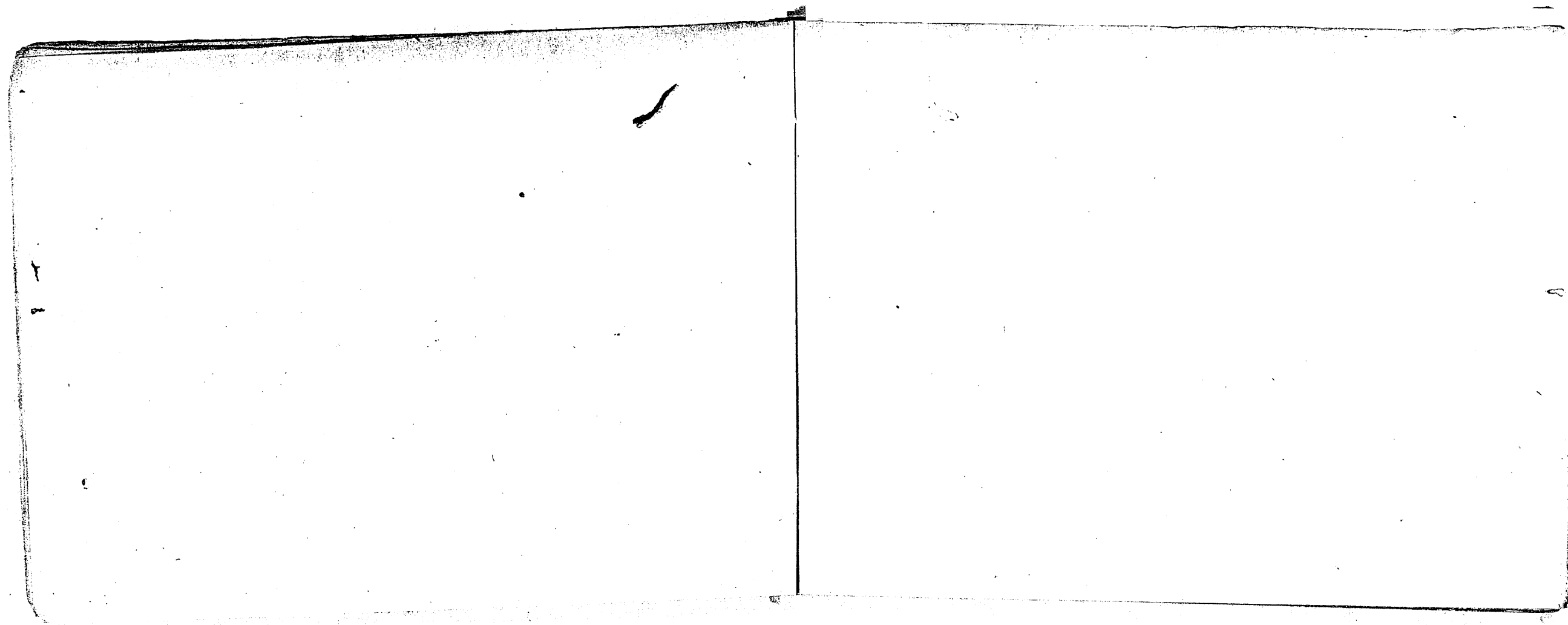
一 幸ふもたつ仕度なりとておぼえぬ

一 幸ふもたつ仕度なりとておぼえぬ

一 幸ふもたつ仕度なりとておぼえぬ

一 幸ふもたつ仕度なりとておぼえぬ

一 幸ふもたつ仕度なりとておぼえぬ



以下 4 葉余白

